

久しぶりに卒業生のRさんとその本の中で出会った。彼女は十八年前、私の研究室の大学院生として、幼虫が野鳥のヒナに寄生して吸血するトリキンバエというハエの生態研究に取り組んでいた。

十勝の森の中で巣箱をかけて野鳥に営巣させ、それを見回る過程で、しばしばヒナの死に直面した。ヒナが死んだ後、シテムシ、ニクバエ、クロバエなど、死骸を食べる昆虫がやってくる。ある命の終わりは、別な命にとって歓喜の生の始まりだ。彼女は、森の中には豊かな命ともにおびただしい死も共存して、ある死は別の生に引き継がれることを学んだ。

もともと身近な人の死を体験していたことから、「看取り」や「ホスピス」に興味を持っていた。大学院修了後、彼女は看護学校に

魚眼図

生と死―森の生き物からホスピスへ

入り直し、正看護師の資格を取り、東京の病院の末期がん患者が多い病棟で五年間勤務した。しかし、そこでの仕事は、患者に深くかわりをもつ「看取り」とは違っていた。

二〇〇六年から、東京・山谷にあるホスピス施設「きほついのいえ」のスタッフになった。そこで身よりのない五十代の男性の終末期に寄り添い、男性の最期の願いをかなえながら深い絆を築いた。五カ月後、その男性は彼女に看取られながら息を引き取った。二人の交流は、その本「大いなる看取り―山谷のホスピスで生きる人びと」(中村智志著、新潮社)の最終章を飾った。十八年前、十勝の森でつぶさに観察した生き物たちの生と死の循環。今、彼女はその体験を独自の死生観へと昇華し、行き場を失った人の終末期の精神性を高め、生と死の尊厳を支えていたのだ。

(岩佐光啓・帯広畜産大教授―環境昆虫学)